

## はじめに

大正大学は建学の由来から地域との関係をととても大切にしています。その地域は様々な課題を抱えています。多くの地域では人口減少に歯止めがかからず、地域の持続可能性すら脅かされています。担い手は減り、産業は活力を失い、雇用も先細るばかりです。

これを克服し、打開するには何が必要か。今、地域がもっとも頭を悩ませているのはこのことです。移住者を増やすことに努力している自治体では、受け入れのための施策を充実させようとしています。

関係人口を増やすことに注力している地域もありますし、国内外の観光客を呼び寄せることによって、地域経済への波及効果の大きい観光振興を図ろうと、魅力ある観光地づくりに取り組んでいる地域もあります。

こうした地域の課題を解決するため、これまでは国の指導や支援策に頼るのが一般的でした。ただ、筆者が県知事を務めていた時の経験に照らすと、国の打ち出す施策は総じて全国一律で、しかも横並びの弊を免れません。それぞれの地域に特有の課題を解決する方策としては、必ずしも効果的でないことがしばしばでした。

もちろん国の支援策は活用したらいいと思います。ただ、国に頼るだけでなく、国以外の知見を活用する選択肢があってもいいはずです。その選択肢の一つが、大学の研究者の知見です。

冒頭で述べたように、大正大学は地域との関係が深いことから、地域を研究のフィールドにしている研究者が数多くいます。地域を研究の対象とし、地域と深く関わりを持ち、地域の課題解決に自ら参画している研究者も少なくありません。

このたび地域構想研究所が発刊する2023年度『紀要』では、研究所だけでなく学内も含めて、地域と関わる研究者の研究成果の一端を掲載しています。これらが各地で地域の課題に取り組んでおられる方々にとって、何らかの参考になることを期待しています。

併せて、自治体のみなさんからは、当面する課題などの情報を研究所に寄せて頂くことを期待しています。すでにその課題を手掛けている研究者がいれば、速やかに地域と研究者を取り結ぶことができます。

そうでない場合でも、寄せられた情報に接した研究者が、その課題を新たな研究対象に取り込むかもしれません。その場合、次年度以降の『紀要』に研究成果が載ることになりますが、それは『紀要』が地域とよりいっそう深くつながることを意味しますので、発刊者としてこれにすぐる喜びはありません。

ともあれ、『紀要』ができるだけ多くの人に読んで頂くことを願って、発刊のご挨拶とします。

大正大学地域構想研究所長 片山善博